

宮城康博さん（元名護市議）のコメント

基地建設には反対だが、経済振興を求めるといふ市民がいる。その人間的な欲求欲望を、バカだと否定するなら、否定する人々が人心と乖離していくしかないだろう。遠く南城市から眺めているだけの私ごときに敗因など知る由もない。だが、なぜ再編交付金に頼らない市政運営のすごさを市民が認識し名護市の価値としえなかったのか。ほんとうに自治研究者や自治体問題に関心のある市民ら、言い方はおかしいが「自治通」からは掛け値無しに評価にあたいする名護市だった。そこを少しでも市民と共有する回路を切り開くべきだった、私もこの問題を見続けてきた人間として猛省したい。身の丈を超えて、市の発展を願ってもそれは持続性がなく早晩限界を露呈する。あたりまえの話であり、名護市および北部広域圏の自治体は 99 年から 10 年間で 1000 億円以上の政府資金を投下した北部振興や、名護市に限っていえばそれ以外に SACO 関連経費や島田懇談会事業、様々な基地関連経費が投下された基地バブルのような状況を経験した。それでどうなったか。どうにもならないなかで、稲嶺市政に変わり、基地バブル後の健全な行財政運営による展開があった。なにゆえに、また政府資金を財源とした経済振興を求めるところにいと簡単に戻るか。

進さんは実直な行政マンであり政治家ではない。だれか近くに政治を考える人間がいて、進さんの仕事の価値を市民と共有する作業をする任を担う役割が必要だったのだろう。

いずれにしても、名護市には条件付き賛成派であった保守系の方々や企業経営者や地域代表が大勢いる。その人たちとコミュニケーションする回路を持たずに、いないかのごとく振舞ってはいけない。分断状況をどうにかしなければと誰もが思っている。我々は正義なのだから、我々に歩み寄れひれ伏しろと言って、分断がおさまるはずはない。歩み寄ることだ、「基地建設には反対だが、経済振興を求めるといふ、市民がいる」という事実をきちんと認識し、話し合う回路をつくらなければならない。

少なくとも、渡具知武豊を支持した若者の一部には、反対派が名護市民の分断状況をつくっているという認識がある。その誤解を解いて、市民の反対意思を無視する国に対して、市民としてどう向き合うべきかをお互いに話し合えるようにしなければいけない。おそらく稲嶺進を支持して動き出した若者たちには、そのことをなす胆力と情熱と聡明さがある。

希望はある。生活者に絶望などしている暇はない。

(2018 / 2 / 9 宮城康博さんの F B から)